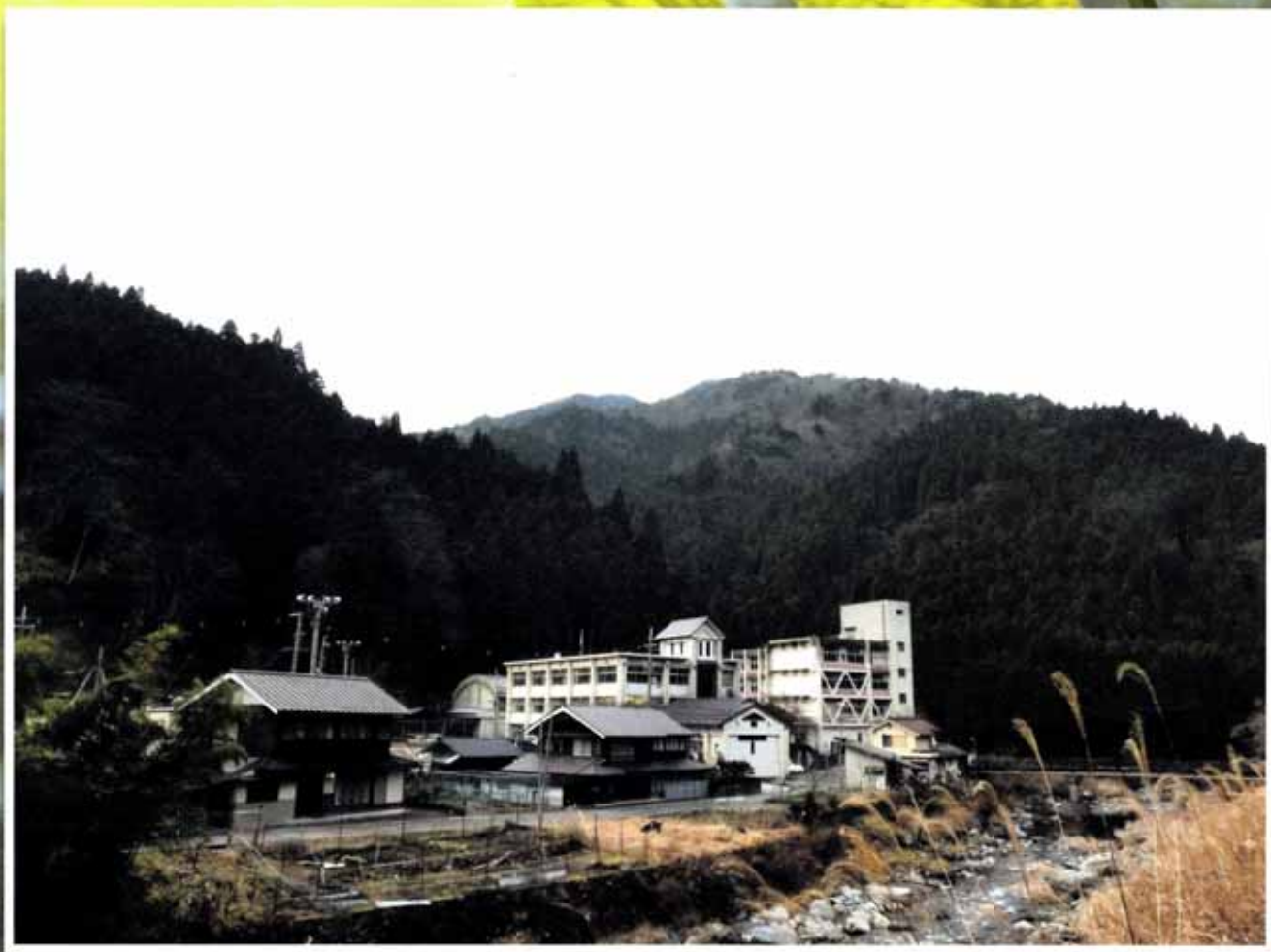


葛川の森林



葛川小中学校と葛川の山並み。

いにしえの葛川

葛川の林業史！

- 9世紀 葛川温井（現葛川貫井町）に惟喬親王を祖とする木地師集団が
住み着く。
- 859年 葛川寺（明王院）、地主神社が相応和尚により創建される。
- 1044年 葛川・朽木の大洪水
- 1152年 明王院が葛川への杣人の乱入を訴える。
- 1202年 井谷、温井谷間の杣作を禁止
- 1256年 葛川に伊香立庄民の炭窯が300基を超える。
- 1450年 京都の材木商人が葛川へ出入り
- 1529年 葛川御料林を農民の要求により伐採
- 1662年 高島市震源の大地震で町居村等が大被害
- 1742年 「近江国大絵図」に葛川特産品として裁縫板、真那板の記載あり。
- 1814年 「近江名所図会」に葛川特産品としてまな板、白、横槌など木製品
の記載あり。
- 1947年 葛川村立葛川中学校開校
- 1967年 大津市と合併



「葛川炭（かつらがわすみ）」

葛川における炭焼きの歴史は古く、昭和40年代中頃までは
当地区の主要産業であった。最盛期には年間10万俵以上の木炭
生産量があったといわれる。大正8年の記録によると合計131
基で約7万7千俵、昭和7年には約9万7千俵との記録が残って
いる。ナラ、カシ、シデ、ツバキ、モミジ等が炭材として利用
された。
(右写真は炭窯づくりの様子)



「葛川の筏流し（いかだながし）」

葛川は一大木材生産地であったため、生産された木材は、4m材にして
7~8本をマンサクから作った縄で右写真のように繋ぎ、安曇川下流の舟木
方面へと筏流しで運んだ。この筏の出来具合が材価に影響したと言われる。
また、木炭や杉皮などの産物も筏に積んで下流へ運んだ。
(右写真は筏流し：引用「おらが故郷」)



「葛川スギ」

葛川の地質は主に古生層であり、スギの植林には適していた。戦後の造林期には、比良スギの種を
採取し、各家庭で種をまき、苗畑で育てて山行き苗とした。各林家の造林の結晶が現在の豊富な葛川
スギの蓄積につながっている。

地元の林家（元葛川森林組合長）森口 金次さんのお話



昔、葛川は、木材と木炭の生産が中心やった。葛川じゅうの人が山仕事
してたんや。地元スギやないと成長が良くなかったもんで、葛川林業
研究会で比良スギの種取りに行ったりもした。苗造りはホンマに大変。
ワシも10万本以上の苗を植えてきた。環境保全や二酸化炭素吸収源と
言われて一生懸命育てたのに、やっと大きく育ったと思たら、今度は間伐
しても切り捨て、木を伐っても買う者がおらん。
それでも、葛川の宝。この木々をなんとか活かして行かんとあかん。

葛川を思う！

滋賀南部森林組合 専務理事 中西 克己さん

葛川地域は古くから林業が盛んで、特に、戦後はたくさんの植林がされてきました。私も先代より引き継いだ自らの所有林を守ると同時に、葛川森林組合（現滋賀南部森林組合）職員として葛川地域の森林管理に携わってきました。また、地域の方々も非常に熱心で、森林組合で事務局を預かっている「葛川林業研究会」では、スギ苗作りのための採種作業ばかりでなく、炭窯の製作、山芋栽培、屋久杉の調査まで多彩な活動を行ってきました。



今では、それらの木々も順調に成長し、今度は間伐が必要な時期になっています。特にスギに適した葛川の土壌のおかげですくすくと成長し、将来は大径材生産も夢ではありません（左写真：すくすく育った「葛川スギ」）。ところが、近年の社会情勢の変化により、間伐による本数管理に手が回らない状況です。良い木を残すためには間伐のタイミングを逃すことは出来ません。特に今回、造林事業の制度の急変もありましたが、間伐材も伐出して売れる時代が再び訪れたと、プラスの方向に解釈して取り組んでいかなければならないと思っています。

去る9月には、葛川林業研究会の会員さんや葛川地域の方で集まり、ちょっと立ち止まってもう一度、葛川の森林を考えよう！という取り組みも始めました。葛川の明日のために、森林組合職員として、もちろん個人としても、葛川地域の方々とともに邁進していきたいと思っています。

葛川少年自然の家における森林環境学習「やまのこ」事業について

大津市立葛川少年自然の家 所長 澤田 英弥さん

葛川は大津市の最北に位置し、西に丹波山地・東に比良山系の西側を流れる安曇川に沿って細長くつづく静かな谷間（たにあい）にあり、杉木立の山並み、清流、輝く星々、そして冬の積雪の多さなど、豊かな自然があります。

この自然の中で、大津市内小学4年生全37校と滋賀大学附属特別支援学校、守山市立速野小学校、滋賀朝鮮初級学校を合わせた40校が森林環境学習を実施しています。展開している「やまのこ」事業の学習プログラムは、①森に親しむ学習（森林浴登山、森林ハイキング、グリーンウォッチング、フィールドビンゴ、サーチ・ザ・ツリー、わんぱくラリー、スノーシューや歩くスキーを使っての雪山自然散策等）②森づくり体験学習（間伐体験、間伐材搬出体験等）③森の恵み利用学習（森の恵みを使った野外炊事、キャンプファイア、クラフトく焼き杉、小枝のキーホルダー、マイ箸、草木染等）④森林の実験・レクチャー（山里のお話）⑤森林と琵琶湖をつなぐ学習（水質検査、水生昆虫採集、ウォータービンゴ等）です。豊富な学習プログラムを展開できるのも、葛川の豊かな自然だからこそです。

加えて葛川少年自然の家では、事前学習 → 当日の体験学習（本研修） → 事後学習の流れを大切にしています。事前学習を実施することによって、子どもたちに興味湧き有意義な魅力のある当日の体験学習が展開されます。また、体験を振り返り、自分の考えを自分の言葉でまとめています。



今盛んに言われている「活用力」を育む一つの糧として、森林環境学習「やまのこ」事業を推し進めています。森の中に入って、様々な木々の種類やその特徴、また森を守るための木の間伐、その間伐材の利用方法、さらに琵琶湖につながる水環境学習へと学習は広がっていきます。（左写真：「やまのこ」の間伐体験の様子）



未来の葛川

葛川の明日を担う子供たちへ

葛川小中学校長 辰巳 晴生さん

「豊かな自然の中でのびのびと育つ葛川の子どもたち」「明るく素直で周囲の人への気配りの出来る葛川の子どもたち」そんな子供たちに囲まれている自分はとても幸せだと思います。同時にこの葛川の子供たちの未来が、明るくそして豊かなものでなくてはならないと常に心しています。

さて、今、本校では自然体験学習を重視した活動に取り組んでいます。豊かな自然に恵まれた地の利を生かし、いろいろと工夫して実践しています。とりわけ本年は、学校近くの山林を借用させていただき、そこにスギやヒノキなどの苗木を植栽する活動に取り組みました。子供たちが卒業するまでにどれだけ成長するかは、こうした樹木の場合、あまり急速には



成長しないと聞いておりますが、そんなことよりも、この活動を通して子どもたちが地域の産業の大切さや自然を守る尊さを学んでくればと考えています。そして、葛川で学んだこと、体験したことをしっかりと身につけ、厳しい現代社会を力強く生きてゆける逞しい力を養ってほしいと願っています。

いつの日か本校を卒業した児童・生徒が故郷に戻り、地域のために活躍してくれることを心より願っている私なのです。

(左写真：自然豊かな山並みと安曇川の流れ)



可能性∞（無限大）・・・ 期待される葛川林業の活性化！

西部・南部森林整備事務所長 水田 有夏志

葛川の中心にある葛川明王院は、平安時代に比叡山の僧、相応和尚がこの地を回峰修験の道場とし、三の滝で修行中に感得した不動明王を桂の木で彫り上げ本尊としたことに始まります。相応が葛川を修行の場としたのは、この地のロケーションのすばらしさ、すなわち今で言えば「森林の保健休養機能」の高い場所であることが背景にあったと思います。現在も「葛川少年自然の家」を拠点に森林体験学習「やまのこ」事業が実施され、豊かな自然を活かした体験・修養の場となっています。

一方、明王院の隣には思古淵明神を祀る地主神社がありますが、思古淵明神は土地の神であると同時に筏の神でもあり、安曇川流域の各地にカッパや筏をめぐる伝説が残されています。かつては筏に組んだ木材や炭が盛んに生産され、葛川の豊富な山林資源の使用権をめぐる周辺地域との争論も文書に残されています。これらの伝説や文書は、この地の森林資源の豊かさ、人と森林の関わりの深さを表しており、スギを中心とした造林・保育も熱心に行われてきました。しかし、近年は林業の採算性の悪化などから生産活動が低迷し、山への関心も薄れつつあります。

このような中、森林・林業再生プランに基づき、零細・分散化した森林の集約化と提案型施業、路網整備や機械化による木材の生産コスト縮減などにより、林業を活性化する取り組みが進められています。葛川にはスギを中心とした豊富な森林資源、大津、京都など木材の消費地や山陰、北陸の大規模な木材加工場へのアクセスの良さなど、林業を進める上で高いポテンシャルがあります。また、古くから林業を生業としてきた歴史や土壌があり、これらに葛川の皆さんの熱意と工夫を加えれば、その可能性は無限大です。様々な課題はありますが、森林組合や行政も一体となって、例えば「葛川方式」と呼べる伐採・搬出方法の確立、「葛川スギ」ブランドの生産など、葛川林業の活性化に取り組んでいきましょう。



葛川あれこれ

葛川地区の概要

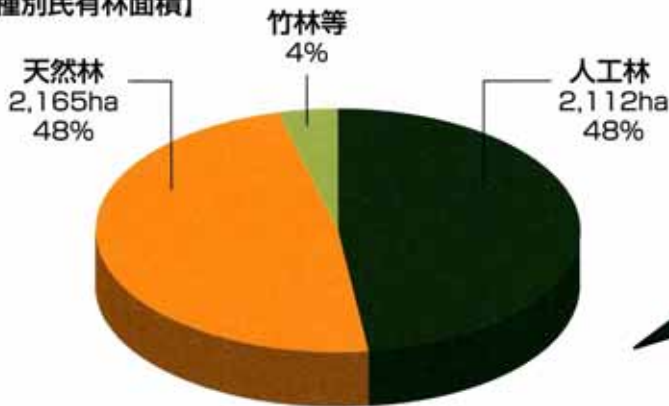
葛川地区は、葛川細川町、葛川貫井町、葛川梅ノ木町、葛川町居町、葛川坊村町、葛川中村町、葛川木戸口町、葛川坂下町からなり、大津市の北部、比良山地の西側、北へ流れる安曇川の上流域にあり、花折断層に沿った渓谷である。

当地区は、林野率が9割を超える森林地帯である。人工林は主にスギで、その他様々な動植物等も確認されており、カツラカワアザミなど葛川の名を冠した独特の種もある。また、比良山系西側の谷合いの高地にあることから、冬期にはかなりの降雪地帯となり、昭和48年には積雪2mの記録が残る。

産業は、昔は、平・坂下・木戸口・中村では炭焼き、町居・坊村では炭焼き・材木、梅ノ木では筏、貫井では轆轤・木挽き、細川では木挽きと主に木材産業中心であったが、現在では、都市部で勤務する人が多い。

データ 葛川！

【林種別民有林面積】



へえ～！葛川の面積の半分は、がんばって植林してきた人工林なんだ～。

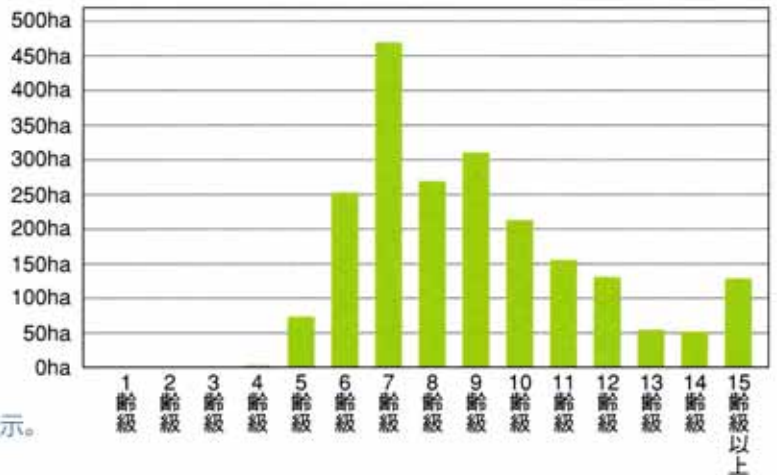


ええ～！20才以下の木がほとんどない～。木を植えないと将来は木が足りないよねえ～



※木の年齢を5年単位で1齢級と表示。7齢級なら30～35年生きた木。

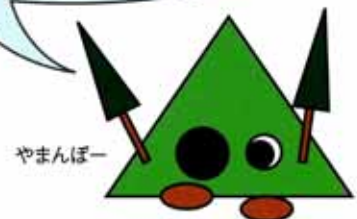
【人工林の齢級別面積】



【葛川の木材蓄積量】

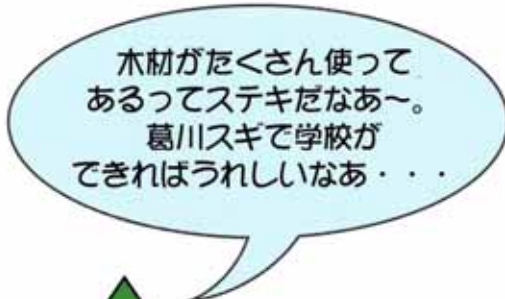


すごい！約40年の間に葛川の木は、どんどん太ってきたんだなあ～！！





葛川地域の雪景色（左に見える屋根は、葛川少年自然の家）



木材を多く使った葛川少年自然の家のプレイルーム

参考文献

- 「葛川歴史年表（古代～近世）」（1982）大津市葛川中学校発行
- 「新修大津市史（北部地域）」（1984）大津市発行
- 「おらが故郷」（2005）葛川学区老人クラブ寿会発行

発行日 平成24年（2012年）3月

編集 **滋賀県西部・南部森林整備事務所**

Tel : 077-527-0655 Fax : 077-523-1831

e-mail dj35@pref.shiga.lg.jp

<http://www.pref.shiga.jp/d/o-ringyo/>

印刷 兼松総合印刷株式会社